

蘇

小

小

1975 9 29

李賀の集で蘇小小の名の見える作は二つ。「七夕」1007と「蘇小小歌」1020である。二首は
まず後者をとりあげる。

蘇小小歌

蘇小小の歌

幽蘭露

幽蘭の露

如啼眼

啼眼の如し

無物結同心

物の同心を結ぶ無く

煙花不堪剪

煙花 剪るに堪えず

草如茵

草は茵の如く

松如蓋

松は蓋の如し

風爲裳

風を裳と爲し

水爲珮

水を珮と爲す

油辟車

久相待

冷翠燭

勞光彩

西陵下

風雨吹

油辟車

久しく相待つ

冷たる翠燭

勞たる光たる光彩

西陵の下

風雨 吹く

文字は北宋本に拠ったが問題がある。拙訳を『幽飲集』『中国名詩選』に収めるけれども、こ
れまた検討を待っている。

左の表は文字の異同の概略を示す。

北 蜀 蒙 秦 朝 錦 官 王 全

蘇小小歌

墓

油辟車

壁

○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

夕相行

風雨吹

吹雨

雨晦

改

○ ○

○

△ △

○

○

○ ○ ○

○

△ △

北は北宋本（宣城本）、蜀は宋蜀本、蒙は蒙古本（四部叢刊）、宋は宋本樂府詩集、朝は朝鮮本、官は官板で明板劉評具注本と同じ、王は王琦注、全は全唐詩、△は校注に「一作」としてその文字を示すものである。

現行の李賀の集を二系に分て、一を宋本系としその代表を北宋本、一を明本系としその代表を錦囊集と仮定する。宋本系と明本系は祖本を異にすると考えるのが自然であろう。清末までの注本はおおむね明本系のものゝ底本とし、宋本系の本や、總集に見える賀の作によって校したものとみえる。両系をつなぐ總集群をいま仮りに樂府詩集で代表させる。

おおまかにいって、宋本系は明本系よりも賀の作の類型をよりよく保存するようにみえる。しかし、宋本系を善美のものとして鵜呑みにしにくいところもあり、内部徴候から推しても両系のいずれかに片寄せて決定しがたいものもあって、李賀の原稿そのものが二種類あるいはさらに多

くあったのではないかと疑わける。

いまとりあげた作品では「油辟車」の辟字は壁字の誤りで明本系の正しいこととあきらかであり、「久相待」の久字が「夕」と記されその一画が消えればただちに明本系の夕字となるところから、明本が誤りだと、ほとんど断定しうる。内容・修辭の両面からも久字がすぐれる。

問題は残る二つで、いずれもこの作品の根柢にかかわる。忽卒の判断をひかえ、全体の検討の結果に待とう。

二

李賀集の最初の注釈者吳正子がこの作についていふ。

祭府広題に云う「小小は錢塘の名倡なり。南齊の時の人」と。劉次莊は云う「小小は唐人にあらず。世のひと（白）祭天・（劉）夢得への詩に題詠すること多きを見て、遂に之と同時に云う」と。予おもえらく、劉の説は贅なり。梁の武帝すでに小小の歌を作り。また何をか疑わんや。

祭府広題は宋の郭茂倩の『祭府詩集』巻八五に「蘇小小歌」を説明するため引用する書名である。『祭府詩集』は「蘇小小歌」を古辞すなわち古い時代の無名氏の作として、次のようにいう。一に曰く、錢塘の蘇小小の歌と。祭府広題に曰く、蘇小小は錢塘の名倡なり。けだし南齊の時の人。西陵は錢塘江の西に在り。歌に云う西陵松柏下これなりと。

の八二下目くVは「蘇小川歌」といふ歌を引く。蘇小川歌にもいふといふ歌がある。たろうが読みかたによつては無名氏の作で何なく武塘の蘇小川の歌だとする説もある。といふふうにとれなくはない。掲げる詩が次のように「我」ではじまるからである。

我乗油壁車

我は乗る 油壁車

郎乗青駿馬

郎は乗る 青駿馬

何處結同心

何処にか同心を結ばん

西陵松柏下

西陵の松柏下

「我乗」を乗乗とし「郎乗」を郎騎とするものがあるが、二二のが古型であろう。

呉注にかえろ。劉次莊は宋の熙寧・元祐の間、一一世紀後半の人。そのころには小川を唐代の人と世人が誤解するようになっていたのであろう。その非を弁じる劉氏の語を蛇足と嘲ったのはよいとして、梁の武帝が小小歌を入すで作っているVというのは何にもとづくのだらうか。現存する武帝の作に小小歌はなく『祭府詩集』の蘇小小歌の直後に武帝の「河之水歌」をおく。あるいはこれを呉氏があやまって記憶していたのであらうか。

王琦の注もまた祭府広題を引いたのち次のようにいう。

方輿勝覽にいう。蘇小小の墓は嘉興縣西南六十步に在り。乃ち晋の歌妓。今片石の通判庁

に在るあり。題して蘇小小の墓と曰う。李紳の眞娘墓詩序に曰く……

方輿勝覽からの引用がどこまでかは知らぬが、王注が言いたたいのは蘇小小の墓が二ヶ所あってその一つは錢塘江の西、いま一つは嘉興縣の西南にある、ということなのだらう。いずれもいま

の浙江省に属するが、西陵は杭州にあり、嘉興はその東北約九〇キロメートルである。

墓の二つはともかくとして、蘇小小その人がふたりいることを明の郎英の『七修類稿』清の趙翼の『陔餘叢考』などがいう。便宜により趙氏の「兩蘇小小」を引く。

南宋に錢塘の妓なる蘇小小あり。郭茂倩の樂府解題に見ゆ。南宋に蘇小小あり。亦た錢塘の人。その姉は太学生なる趙不敏の嘗ると云ふとなる。不敏その弟に命じて、その妹の小小と名づくる者を娶らしむ。武林旧事に見ゆ。

南宋の小小は幸福な結婚をしているのだから、歌われた蘇小小でないことは明らかである。ところでさきの王注によれば晋にも蘇小小という歌妓がいたことになり、その墓が嘉興にあるものなのであろう。

古辭も賀の詩も八西陵下Vという。その蘇小小の墓は杭州のにきまっている。と言いたいところだが、王注が引く李紳の真娘墓詩とその卒を読めば、古辭とのかかわりとはとにかく、賀の作のばあい一概に捨てきれぬ。

呉の妓人の歌舞に名ある者。死して、呉の武丘寺前に葬る。呉中の少年、その志に従うなり。墓に、花草の以て其の上を満たす多し。嘉興県前にも亦た呉の妓人蘇小小の墓あり。風雨の夕、或ひは其の上に歌吹の音あるを聞く。

一株の繁艷は春城に尽き、双樹の慈門に忍草生ず。愁態自づ随って風燭滅し、愛心逐い難く雨花輕し。黛は波月に消えて蟾影空しく、歌は梁塵に息んで梵声あり。還た似たり錢塘の蘇小小、まさに首を廻らすは是れ卿卿なるべし。

八風雨の夕。Vは賀の小詩とす。新「唐書」「唐才子伝」などによつて経歴を知
紳については賀の友の沈亜之が伝を書き、旧「唐書」「唐才子伝」などによつて経歴を知
りうる。吳地に家居し、元和元年進士、皇甫湜と同年で、賀と同族の李絳の客となつたことがあ
り、賀の友張又新とも交つてゐる。ふたりの作のどちらが先だつか定めがたいが、詩に關する情
報流通の敏速だつた当時だから、影響するところがあつたと考えるほうが、なかつたと考えるよ
り事実に近そうである。

李紳の序と詩から察すると、かれは嘉興の小小墓は実見してゐるようだが、杭州の墓は知らな
かつたらしい。李賀はどうだろうか。斎藤暁注はいう。

南齊時代の歌妓で有名な美人の蘇小小はよく詩家の題材にされる。蘇小小の墓は今でも杭州
の西冷橋畔にある。李賀は約三百年前の美人の墓を弔つたことになる。しかし実際にそこを
尋ねての作ではなく、いわゆる寄題で、想像による作である。それには南齊のころの雜歌謠
辭にある蘇小小歌にもとづいてゐる。

賀の作が、古詩の蘇小小歌にもとづく想像の作であることは、疑う余地がない。けれども入実
際にそこを尋ねての作ではなくVというのは武断にすぎる。朱自清のいうように、かれは呉楚の
地を實際に経験してゐたと考えるほうが、賀の詩を味わう上で妥当であるように思われる。かれ
の見た蘇小小の墓が嘉興のか杭州のか定めがたく、杭州のものであるにしても西冷橋畔にあるい
まの姿のそれでないことは確かだけれども。

唐代の陸広微の「吳地記」(漢唐地理書鈔)の嘉興縣の条に八県の前に晋妓錢塘の蘇小小の墓

ありVという記事がある。唐の人といつても陸氏が其の何時ごろの人かわたしは知らぬ。『祭祠詩集』の引く祭祠広題が、いつ誰が書いたのかも知らぬ。それだけのいう蘇小小が同一人かどうかとも定めやすくない。錢塘の妓人にすでに画車中のあることがあきらかなのだ。三小小の存在を推測する余地はありうる。

蘇小小は名倡という、ところが、なぜ名があるのかをたずねて文獻を搜索しても、古辞の「蘇小小」にうたわれることと、その墓のこと以外に何もうかぬ。書代にはくわしい口碑が残存したのかとも思うが、李賀と其の同時代人以前に蘇小小をつたう詩人もいないようで、彼女が名高くなるのは、ひょっとしたら李賀の詩によつてであるかもしれぬ。

蘇小小を考えるには、史から詩を見るだけでなく、詩を熟視して史の默殺した事実を幻想する以外に道がないのだ。

三

李賀の蘇小小詠が古辞「蘇小小歌」にもとづくことは疑いない。古辞の検詩は賀の作を考察する前提だろう。

我口来る 油壁車

油は油漆、すなわちウルシ。壁は車の壁面。油壁車とは、壁面をウルシで彩飾した美しい車をいう。『晋書』の輿服志に、夫人の使用しうる車を油戟車Vと規定する。注に八釈名に曰く、

新婦なり。四屏。婦人を載るVといふのは、油壁車に上る人の車である。公夫人の御車といふ
女御・更衣にあたる。尊貴の地位にある人の使用するものと倡女のそれとがまったく同じといふ
ことはないだろうが形式は似たものである。『南齊書』都陽王綰の伝に謝朓という男が「殿下よ
ただ油壁車に乗って宮に入りたまえ」とすすめる話がついてゐる。人目をあやむくために婦人の
車を使うことといふのであらう。

郎は来る 青驄馬

青驄馬とは白黒まだら毛の馬である。青驄馬といへば人がただちに思いおこすのは漢代の無名
氏の「古詩・焦仲卿が妻の爲の作」の「躑躅たる青驄の馬、流蘇は金縷の鞍。……Vの一節であろ
う。漢代末期の建安年間、廬江県（今の安徽省）の小役人である焦仲卿の妻の劉氏が、仲卿の母
に追い出され、実家では再婚を強いるので投身自殺し、これを聞いた仲卿もまた庭で縊死する。
当時の人がこれをいたんで作ったといわれる長篇物語詩である。その全訳を拙著『歴代名詩集』
に収める。引いた句は、劉氏が再嫁すべき家から結納の金品を運ぶ車馬の美質を形容する語であ
る。

△吾乗油壁車 郎乗青驄馬Vには相思の男女が車馬を並べて遊歩するような浮きうきしたリス
ムがある。しかし、青驄馬によって、それがあの古詩にもとづくことがわかると、この二句の構
成が同じ詩の「府吏馬在前 新婦車在後V」と酷似することに気づく。相愛の府吏と新婦が心なら
ずも訣別する場面をうたう句なのである。

何処にか同心を結ばん

同心とは、心を合わせる事。男女が契りを結ぶ事である。「詩經」邶風の谷風がこの語を使う古い例だ。

習習谷風

じゅうじゅう 谷風

以陰以雨

曇ったり 雨ふったり

黽勉同心

せつせと心を合わせてきた

不宜有怒

怒ることなどありゃしない

采芣采芣

かぶら採り 大根とる

無以下體

根っこばかりじゃあるまいに

使直氣遠

やさしいことばが違わねば

及爾同死

死ぬのもいっしょと思つたに

夫に系つけられた女の悲しみを歌う。「易經」繫辭上に二人同心せば、其の利ききこと金も断た
ん。同心の言は、其の奥い蘭の如ししと云う。同心相愛は、よろこばしく楽しくめでたいことだ
が、永続しがたい。古詩に二人同心にして離り合あひ、憂傷してもって終老しすしと云うたうけえんであろ
う。その離合を嫌ひ憂傷を避よけようと願う心が、同心結・同心帯などを発明した。これについて
は、後にさらに触れることがある。

八何処にか同心を結ばんしとは、どこで契ろうか、といふことであり、恋の糸をどこに送ばう
か、といふことである。しかし、この同心の語が遠く谷風にその糸を汲むものなら、谷風の結句
の同死も、ここに遠響をひびかせているものと考えて差支さしへはない。結同心は結同死であり、す

なれち、何処結同心はどこで死にましようか、ということになる。焦仲卿の妻をうたう詩に於れば、新婦劉氏の侍妻なる夫に告げる人眞泉の下に相見えん、今日の言に違ふこと勿れ、の誓いの語があつて、「蘇小小歌」の何処結同心がこれに相当することがわかる。そうして、

西陵の松柏下

が焦仲卿の八両家合葬を求め、合葬す華山の傍。東西に松柏を植え、左右に梧桐を種う、Vを承けることも、いうまでもないことであらう。松柏は墳墓を示す木である。

古詩「蘇小小歌」が「焦仲卿の妻の爲に作る」古詩を念頭においてなされた作であること、ほとんど疑いない。だが、ことわるまでもなく二つは異なる。蘇小小は倡人で、劉氏は官吏の妻である。劉氏は詩中で、容貌・才能・家門・経歴が描写されるが、蘇小小については、さう不明である。劉氏^は、たん結婚したのを詩別されたのだが、蘇小小はたぶん結婚してはいない。

共通するのは、地上で完成しない愛の結合を地下で完成させようとする女の願ひだけである。

四

古詩「蘇小小歌」は、五言四句、きわめて短かく、一見單純だが、子細にしらべると技巧をこらした作品だ。ほろりとする悲哀をたたえた詩だが、それが庭里で男どもを吸ひ寄せようとする女の手練手管の一つかもしれない。また、そこで歌われる詩には表と裏とがあつて、青陵松柏下が性戯の極点をさす隠語であつた、というような事情も仮設の中に入れておく必要がある。

この詩と前後して「華山畿」「読曲歌」「西曲歌」「襄陽樂」などの民謡がぞくぞくあらわれた。それらの作者は遊里の女か、その周辺にいた者か。いずれも酒席でうたい、客をとろかす道具でもあり、またいくらかは女たちの真情でもあった。

華山畿

慄慄不堪止

慄ましくって堪らない

上林解要繩

床に上がって 帝といって

自經昇風囊

軍風のうちらで首をうつる

同

啼客曙

泣きあかす

淚落枕將浮

涙に枕は浮きあがり

身沈被流去

体は沈んで流れゆく

読曲歌

自從別郎後

主さんと別れてからというもの

臥宿頭不舉

宿に寝たきり頭もあげぬ

飛龍落葉店

葉屋に落ちて干物にされた電

骨出只爲汝

骨の出たのはただ主のため

同

懷心常嫌嫌

いつもこがれているわたし

歌行由豫情

主はのんびり行つたきり

霧露隠芙蓉

霧にかくれた蓮のかけ

見運詎分明

コイがすむとは知れように

遊里で発生したこの種の詩は、知識人によってたちまち模倣され、洗練される。梁の庾肩吾の「南苑に人の還るを見る」のときはそのいちじるしい例である。小林太市郎『王維』にすぐれた解説がみえる。左に引こう。原詩はわたしが加えた。

春花は玉顔と競って

春歌競玉顔

俱に折り復俱に攀ず

俱折復俱攀

細腰は窄衣に宜しくて

細腰宜窄衣

長釵は巧に髻を挟めり

長釵巧挾髻

洛橋は初めて燭を度し

洛橋初度燭

青門は関の上るを欲す

青門欲上関

中人も亦に望有るべし

中人應有望

上客よ前に還る莫かれ

上客莫前還

上関はかんのきを開すことで、それをさしてほしい青門が女門、かんのきが男茎を指すことはいままでもない。ついでに洛橋の橋も人をのせて渡すという隠語でやはり女陰を意味し、燭はその形からして男のものゆえ、洛橋が初めて燭を度すということば、すなわち巫女が初めて開通することになる。それに対して、青門というように青草の繁茂した門は、すなわち

爛熟した女体の門で、それがかんめきをさして欲しいというのも、いかにもふざわしい。要するにこの奥詩の意味は「花のような玉頸の処女も細腰なまめく年増も、みな競ってあなたたち殿方の物を折りまげまた攀じさすって快く弄ります。細い腰を入れるには窄い衣がよく長い簪が上手に髻をはさむように、殿方の物が細くても長くても、それに合う人がいてみなくまくはさんで受け入れます。乙女の橋は開通を待ち、年増の門は開が欲しい！殿方よ、いまお帰りなさっては惜しい！中人も望みがもてます。上客よ、帰ってはいけません。」という勧誘の引き止めのことばにはかならない。南苑の春日にはきつとそういう女の市が立ち夜はことに賑わったので、庾肩吾は夕暮にかえる愚人に托して、その花やかなおもしろさをこの詩に詠んだのにちがいない。

齊・梁・陳・隋の知識人はこの種の詩を風流とよろこび、皇帝・皇族も作者たることを耽じ、その風は南朝だけでなく北朝にも及んだ。書の太宗が少年のころ體体の詩を好んで自から作ったのはその影響といえるであらう。

李賀の「蘇小小歌」が、古詩の模倣にすぎないのか、あるいは骨を換えてその胎外に超脱するものが、賀の歌そのものを子細に点検しなければならぬ。

五

蘭といえは、いまのわたしたちはラン科の植物を手で用いつかへる。中国では、その名を蘭と稱しはするが、唐代ぐらまでは、日本でフジバカマとよぶキク科の植物を蘭の字であらわしたらしい。しかし、春蘭とよぶ春さくラン科のものは蘭花として通り、やはりラン科の秋さくものを福建原産ゆゑに建蘭とよんだらしい。李賀がその詩に幽蘭とつたうとき、キク科ラン科いずれの花を念頭におきイメジとして持ったかは、ほとんどさぐるすべがない。けれども、かれの詩法からいって、愛する古典に用いられた幽蘭の語義と、この語を含む文脈とを、そっくりこゝでも背景にひびかせながら、やがてかれの意図する方向に收斂してゆくように使用しているだろう。

蘭は古代には蘭とも書いたらしく『詩経』鄭風の溱洧にみえる。

溱与洧

溱のかわと洧のかわ

方渙渙兮

あふれてきらきら

士与女

男と女

方秉蘭兮

蘭とる李節

女曰観乎

女いう 見にゆきましょか

士曰既且

男いう とつくにさ

且往観乎

でもさ 行って見ましようよ

洧之外

洧のかわ向こうは

洧許且采

とつても広くて楽しいわ

維士与女

そこで男と女とが